

かすり傷

2022. 6. 27

いつの頃からだろうか。子どもたちに失敗させないように、大事に大事に育てようという流れになったのは。少子化の影響もあるだろう。子どもが少なければ、大事に育てるのは当たり前のことである。

ずいぶんと前になるが、運動会の徒競走で、みんなで手をつないでゴールをするという話を聞いた。「大丈夫か」と思った。校庭の遊具は、遊具ではなくなった。子どもにとって危険なものとなった。学校への侵入者、不審者、川や沼での事故など、様々なことが起こり、世の中が変わっていった。子どもたちだけで公園で遊ぶ姿など見なくなった。

昔話をしても仕方がないが、我がことを振り返ってみる。校庭の鉄棒では、飛行機跳びなる技を磨いていた。今思うと、まるで器械体操である。危ないこと、この上ない。ブランコでは、飛び降りて、どこまで跳べるかを競った。今の子どもたちがやれば、きっとけがをする。

夏には、川に入りカジカをとった。川は、天然の流れるプールだった。楽しいこと、この上ない。今であれば、たぶん通報される。夏休みには、カブトムシをとりに行った。カブトムシがいそうな木を探して歩いた。そこには、誰の土地か、誰の所有物かという概念はなかった。

秋になり、稲刈りが終わると、人の田んぼに勝手に入り、ゲリラカイトを飛ばしていた。田んぼは、すべて自分のものだった。栗拾いにもいった。間違いなく我が家の栗ではなかった。そもそも我が家には栗の木はなかった。

学校帰りに、立派なタケノコを見つけた。一生懸命、引き抜いた。意気揚々と家に持ち帰り、母親に見せた。なぜだかあまり喜んでくれなかった。もっと喜んでもらえると思っていた。後で知ったことだが、どうやら母親は、タケノコの所有者のお宅に謝りにいったらしい。道理で褒められるわけがない。かといって、叱られることもなかった。今であれば、大問題である。

今思うと、私の子ども時代は、“かすり傷”だらけである。これは、実際のかすり傷もあるが、多少の失敗のことである。冷静に考えると多少の失敗の枠を超えているものが多いようにも思うが。

現代では、多少の失敗、すなわちかすり傷を許容することが難しい。全く傷がつかず、社会に出ることがいいのだろうか。世の中に出てからのかすり傷が、かすり傷で済まず、大きな傷にならないければいいのだがと考えてしまう。

中学生が生活する学校では、多少の失敗を推奨するわけではないが、せめて許容はしたいと思う。いくつかのかすり傷ならば、かえって子どもたちのためになると思うのだが、現実には難しい面もある。学校はミニ社会である。一般社会の影響を受け、世相を反映している場所でもある。だが、学校の最大の武器は、教育ができるという点である。このことを生かしていきたい。